

(熊本県立松橋支援) 学校 平成 27 年度学校評価表

1 学校教育目標
一人一人の児童生徒を大切に、それぞれに応じたきめ細かで専門性の高い教育及び地域等との連携により、個性が輝き、生き生きと活動する子どもの姿を実現する。

2 本年度の重点目標
(1) 知肢併置校としての教育の発展 (2) 氷川分教室の教育内容の充実 (3) 個に応じた指導及び支援の充実 (4) 専門性の向上 (一流をめざす) (5) 人権教育の推進及びいじめ防止へ向けた体制の確立 (6) 学校安全及び緊急対応に関する取組の推進 (7) 進路指導の充実 (8) 寄宿舎と学校との連携 (9) 地域と連携した教育活動の推進及び地域支援ネットワークの充実 (10) 職員一人一人が力を発揮しやすい学校づくりの推進 (11) 全肢P連熊本大会へ向けた学校総体としての取組の推進 (12) 創立50周年記念事業に向けた着実な取組

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	職員が児童生徒と向き合う時間を確保する。	課題解決・業務改善に向けた組織的取組	PDCAサイクルによる業務改善を全教職員が行い、学校改革の意識を浸透させる。	全職員が自己の課題に対する取組を年度末にレポートとして提出する。また、主任主事等が中心となり、業務改善の目標を設定し、取り組み、次年度の分掌業務等の削減につなげる。	B	年度初めの育成面談で職員に授業や校務に対し課題意識をもって、また主任主事等にも同様の視点で業務運営を行うように助言した結果、概ね達成できた。その背景には会議等を精選したことがある。次年度も引き続き学校改革に向けた取組を継続したい。
	氷川分教室の教育活動を推進する。	作業学習の充実	総合サービスや園芸の作業学習の実施に向けて計画的に進める。	施設設備の整備を図り氷川分教室完成年度に向けて3年間を見通した指導計画を完成させる。	B	総合サービスでは機械を使った清掃活動や園芸では野菜の収穫・販売をし、充実させることができた。しかし次年度に新たに室内工芸をスタートさせることもあり、大まかな年間計画までは作成できたが、3年間を見通した指導計画の作成までは至らなかった。
授業の充実	個に応じた指導の充実を図る。	各教科、領域・教科を合わせた指導、自立活動についての授業改善	各学部、学科の学部会、ミーティング等において授業改善の検討を行う。	各学部、学科における今年度の実践研究に関する目標を明確にしたうえで、学部会やミーティング等の持ち方を工夫し、授業改善の検討を行う。	B	各学部、学科の実情に応じて、ミーティングや学部会、合同研究会等を実施し、研究課題に沿った協議を深め授業改善につなげることができた。また、2月に校内実践報告会を実施し、今年度の研究や実践事例における成果と課題をポ

						スターセッションにて報告し合ったことで、学校全体で共通理解を図ることができた。
新学習指導要領と児童生徒の実態に応じた教育課程編製のシステムづくりを行う。	適切な児童生徒の実態把握と目標の設定	全児童生徒について客観的な実態把握に基づく目標設定を行う。	CRT（学力検査）や指導内容チェックリスト、自立活動実態把握表等、各学部、学科で用いているツールを活用しながら実態を把握し、目標設定を行う。	B	各学部、学科等それぞれのツールや手順を踏まえて、細やかな実態把握、適切な目標設定に努めることができた。特に小・中・高重複学級における「実態把握関連図及び指導仮説」については作成方法、様式等について年間を通して検討し、改善・改訂を行うことができた。更なる理解と定着が課題である。	
	一貫性・系統性のある指導内容の選定と活動内容の設定	適切な指導内容の選定と活動内容の設定に向け、各学部・学科の課題を出し合い、共通理解を図る。	個別の指導計画や指導目標一覧表の作成・活用や児童生徒の反応（授業研究）を通して現時点での指導内容や年間指導計画の課題を出しあう。進捗状況を教育課程検討委員会で確認し共有する。	B	上記項目のツールを使用して把握した児童生徒の実態をもとに、指導内容や年間指導計画を作成することができた。学部会や学部研で検討を行い、学科によっては来年度教育課程について教科等を新設、時数の見直しも行った。	
	学習効果を高める指導形態、妥当性のある授業時数等の設定	全学部について適切な指導形態・授業時数等を設定する。	年間指導計画（指導の実際）や指導の記録等のツールを用いて、学期毎に反省を行い、適切な指導形態・授業時数等を検討する。	B	現在、学部・学科毎に授業を実施し、成果・課題を整理している段階である。評価ツールを新たに作成したり、来年度の年間指導計画を作成に着手したりしている学部・学科もある。3月中には来年度の年間指導計画を作成したい。	
キャリア教育（進路指導）	現場実習・体験学習に関する体制を強化する。	現場実習・体験学習の効果的な実施と進路の充実	高等部では、年2回の現場実習、体験学習を実施する。必要に応じて臨時実習に取り組む。	B	進路担当と担任と連携し、計画に沿った現場実習、体験学習が実施できた。生徒にニーズだけでなく、生徒の有能がもてる仕事、経験が次に生かせる体験先や雇用に結びつく実習先の検討と新規開拓が必要である。	
	進路指導関連授業の計画と福祉制度、福祉サービスの理解を	進路学習、進路研修の充実	3年間系統立てた進路学習（職業生活）と保護者・職員の進路研修会を実施する。	B	卒業後に必要な力や3年を通し、身につけた力を元に各担当間での話し合いや見直し、教材の共有等を行い、系統性のある計画作成と実施に努め	

	図る。			生徒の進路支援に活かす。		た。専門機関から講師招聘を行い生徒や職員保護者に向けた研修を実施することができた。
	卒業生アフターケアの充実を図る。	離職者を出さない、進路支援・アフターケアの推進を図る。	昨年度卒業生のアフターケアの実施と過年度卒業生の情報を把握する。	就労先への巡回相談を計画的に行う。離職を未然に防ぐための、就職先や就労支援機関とのネットワークを密にしたアフターケアを実施する。また卒業生行事を企画し、悩みや状況を把握する。	B	配慮を要する場合は巡回回数を増やしたり、本人と休憩時や休日に面談を行ったりした。関係機関と連携を取り合い、必要な支援を明確にして事業所や生活の場も含めた支援を行った。アフターケアを行う中で在学中に育てる力や教育の場での課題も見えてきた。
生徒 (生活) 指導	児童生徒行方不明時における捜索体制の確立と登下校時の安全を確保する。	緊急捜索体制の整備 通学路の安全点検と登下校指導の徹底	職員の役割の明確化と、危機管理意識付けを推進する。 定期的に登下校指導を実施する。	長期休業毎に捜索訓練とマニュアル確認を行う。 学期はじめの登下校指導及び毎週金曜日の下校指導を実施する。	A A	氷川分教室のマニュアルの整備および現地での訓練を実施したことで、職員間の共通理解を図ることができた。 計画通りに実施することができた。またバス会社との情報交換も行うことができた。
	各学部、学科の実態に応じた生活面に関する指導の充実を図る。	学校の決まりやルールの明確化と定期的な集会活動の開催	積極的な生徒指導（予防的な指導）の充実および職員による組織的な対応を図る。	学校生活の中で起こっている様々な課題や状況に応じた話題を提供し、SST的な要素を含めた指導や講話を実施する。	B	生徒に対しては定期的な集会活動の開催および問題となる事案が生じた場合に適宜指導を実施したことで、問題が深刻化する前に対応することができた。職員間での共通理解という面で改善が必要である。
	命を大切にすることを育む指導の充実を図る。	命を大切にすることを児童生徒に育む学習の充実	体験的な学習を通して、命を大切にすることが高まるような学習内容について取り組む。	植物を育てたり、身体の健康について考える学習をしたり、命の大切さに関する本の読み聞かせを行ったりする活動等に取り組む。	B	交流及び共同学習や各クラスで取り組まれた。人権に関する図書を10冊購入し、今後も啓発に努めたい。
人権教育の推進	児童生徒の自己肯定感を高め、互いの良さを認め合う学校づくりを目指し、人権教育に関する指導の充実を図る。	児童生徒の人権意識の向上	人権意識が高まるような学習内容について検討する。	互いの取組を全児童生徒で共有できるようにする。 学部・学科での取組の中で、互いの良さを認め合い、児童生徒が活躍できる場を設定する。	B	全校集会では、学部・学科の取組を発表し合いお互いの良さを認めあえた。始業式・終業式では、文化的・体育的な活動での活躍を表彰した。今後も継続したい。
		職員の人権意識の向上	人権意識を持って、学部・学科や交流及び共同学習に	学部・学科において取組後人権教育記録をとり充実した取組にす	B	多くの取組の中から学期に1事例について人権教育記録をとり、次の活動に活かし

			取り組む。	る。児童生徒の自己肯定感を高め、互いの良さを認め合う学校づくりに関した人権レポートを作成し、発表し合い、人権意識を高めるようにする。		た。夏季休業中に人研レポートを提出し、互いに発表し合い、人権意識向上に努めた。アンケート結果より、昨年度に比べ、人権意識の向上が見られた。
いじめの防止等	いじめ問題の早期発見と早期対応を実施する。	各学部、学科の実態に応じたいじめに関するアンケートの実施。	アンケート結果を基にした児童生徒の実態把握と早期介入を実施する。	定期的にいじめに関するアンケートを実施する。問題事案が生じた場合は学部等を中心に組織的に対応を検討する。	A	アンケートの実施を通して、いじめに気づく目および、いじめを生まない土壌作りを進めることができた。また、問題となる事案が生じた場合も、すぐに担任による聴き取りが実行できていた。
	学校総体としていじめ防止の取組を実施する。重大事態への対応マニュアルを整備する。	外部の専門相談員を交えたいじめ防止対策推進委員会を組織する。	児童生徒が相談しやすい体制を整え、いじめ防止の取組を推進する。	校内におけるいじめ相談員を7名選出するとともに、各学期1回いじめ防止対策推進委員会を開催し、必要に応じた協議を行う。	B	本校における重大事態への対応マニュアルについては、職員研修で周知を図ることができた。いじめ防止対策委員会については計画的に開催することができたが、学期に1回開催予定の職員研修については、余裕を持った計画の立案等ができていなかった。
地域支援	特別支援教育に関する校内・外での理解啓発を図る。	各種研修会の実施	特別支援教育センター的機能充実事業における講話、実地研修などを行う。	講話等には近隣の学校にも呼びかける。校内では研修後、教師一人一人の専門性向上が図れるよう支援する	A	外部講師を招いての講話や授業助言など多数行うことができた。教職員一人一人の専門性向上に役立った。
			基礎講座、指導力向上研修を行う。	教育事務所、各市町特別支援連携協議会と連携し、計画・運営にあたる。	A	各機関と連携しながら計画、運営にあたることもできた。さらに次年度も改善しながら取り組んでいきたい。
	一人一人の教育的ニーズの把握に基づいた支援を行う。	校内支援の実施	自立活動を中心に授業参観し、アドバイスをを行う。	児童生徒の実態に応じて担任と話し合いながら、支援を進めるようにする	B	自立活動の授業を見て回り助言をした。支援シートやVTRなどを使用し、わかりやすく継続的な支援の工夫や専門学科、氷川分教室の支援のあり方について検討が必要である。
		巡回相談及び教育相談の実施	巡回相談及び教育相談に可能な限り応じる。	特別支援教育コーディネーターを中心に、ケースに応じて関係機関と連携しながら対応する。でき	A	市町から依頼のあった相談にも応じることができた。数回は複数の職員で出向くこともでき幅広い助言ができた。継続して相

				るだけ複数で対応するようにする。		談に応じられるような工夫が必要である。
保健安全指導	医療的ケアの適切な実施を推進する。	実施要項に基づいた適切な実施	医療的ケアに関する事故を絶対に起こさない。	ほほえみ連絡会等での共通理解と体調急変時の対応マニュアルの確認及び改善を行う。	A	日常・ほほえみ連絡会で連携を取って対応した。児童生徒の状況に応じて必要時マニュアルを変更し、適切に対応した。
	緊急対応に関する取組の充実を図る。	緊急対応について職員の意識向上	日常的な点検と、安全対策マニュアルを確認する。	各学部において緊急時シミュレーションを実施する。緊急時の一次搬送先を宇城地域に確保する。	A	今年度緊急搬送が必要なことがあったが、シミュレーションのように迅速に対処することができた。来年度も徹底していきたい。
情報教育	校務におけるテレビ会議システムの導入整備を進める。	「本校」「氷川分教室」間のテレビ会議システム整備	「職員朝会」「会議」「職員研修」等、日常的な活用を目指す。	1学期中に必要機器を用意・準備する。日常的に使用できるよう、機器はすぐに使える状態に設置する。夏期休業中までに適宜の送信テストを行い、必要な部分を改善する。	A	計画通りに必要機器を購入・準備し、数回の送信テストを経て2学期からは職員朝会を中心に完全実施することができた。今後、職員の移動等に伴う負担を軽減できるよう、会議や研修、授業等においてシステムを活用していきたい。
	「開かれた学校」を目指した本校ホームページの発信を進める。	「見やすい」「伝わりやすい」ホームページの構成の検討・工夫	構成及びデザインの検討・工夫を行う。 多くの情報を発信する。	適切な文字のサイズ・フォントを検討したり、図や写真を多く活用したりする等、構成及びデザイン等の見直しを1学期中に行う。地域広報誌「きらり」の年10回の発行を継続しつつ、「学校アルバム」「氷川分教室のアルバム」等、日々の教育活動を知らせるページを新規開設する。また、「運動会」「販売会」等、学校行事の案内等を多く発信する。	A A	魅力あるホームページづくりに取り組んだ。年度当初よりホームページの構成やデザインを検討し、改善することができた。 「きらり」では学校行事を始め、各学部の普段の教育活動も掲載するよう努め、計画通り発行した。配付地域を近隣地区だけでなく1月から宇城市の近隣の小学校及び県立学校にも拡大した。今後、鏡地区の各学校への配付も検討したい。「開けた学校」を目指して、「学校アルバム」「氷川分教室アルバム」のコーナーを新設した。各学部の活動の様子を写真を交えながら掲載した。
寄宿舎指導	児童生徒一人一人の心身の健康の維持・増進	心身共に健康で具体的な目標を持った生活の支援日々の健康観察の徹底と変容	欠席や早退が無く、一人一人が明るく学校に通える体と心の基礎を	必要に応じて保護者、担任、養護教諭と連携し情報交換を行う。具体的テーマを持	B	健康面や生活面での課題が見られた生徒には、各棟で話し合いをし、担任や保護者等とも連携した。テーマ

	をする。	等に対する迅速で客観的な判断	作る。	った職員研修を行い、子どもを育てる視点を充実させる。		を持った職員研修はさらに検討する必要がある。
	寄宿舎生活を充実させ、来年度の入舎希望者を31人以上にする	生徒に合った舎内行事の実施とわかば会活動の充実	在舎生一人一人が楽しみや期待感を持ちながら、めりはりのある生活ができる。	生徒が企画し、チラシ等で地域への呼びかけを行う。舎での行事等を自分たちで考えたり、報告したりする。	A	生徒たちから希望を募り、やり方も職員と一緒に考えて、レクレーションなどを企画実行することができた。話し合い活動や協力してすすめることなど今後も大切にしていきたい。

<p>4 学校関係者評価</p> <p>○児童生徒の授業、進路指導、学校行事など職員が一丸となって児童生徒のために真面目に頑張っている様子が伝わってきた。ただ、アンケートで保護者と先生方で評価がずれているところについては、何故かということについてしっかりと分析、把握していくことが大事だと思う。</p> <p>○本校の多くの児童生徒と訓練等で関わっている。関係機関との連携や協力はとても重要である。今後も、訓練見学等をとおして連携を図っていきたい。また、本校が受ける市町の巡回相談等でも協力していきたい。</p> <p>○「根拠のある指導計画の作成のために日々の授業参観を大切にしたい」という話は参考になった。自分自身の仕事、就労移行支援サービスの分野においても「現場に行き確認する」ことが必要だと思った。</p> <p>○A型やB型の事業所において活動自体には取り組むことができて必要な支援等が受けられないため利用できないケースがあることや地域によっては設置数が少なく選べないことを聞き、そのような状況を是非然るべきところで発信していきたい。</p> <p>○学校評価については、客観的に見て次年度に生かした取組にしてほしい。</p>

<p>5 総合評価</p> <p>昨年度までの2カ年間の文部科学省の指定研究を経て、今年度も引き続き授業の充実を図るために研究に取り組んだ。各学部、学科ごとに、ミーティングや学部会、合同研究会等を実施し、研究課題に沿った協議を深め授業改善につなげることができた。2月に実施した校内実践報告会では、今年度の研究や実践事例における成果と課題をポスターセッションにて報告し合ったことで、学校全体で共通理解を図ることができた。</p> <p>特別支援教育に関する専門性の向上については、外部講師による研修を計画的に実施するとともに校内支援体制の充実に努めた。また、地域支援についてもコーディネーターを中心に巡回相談や教育相談に対応し、一定の成果を得た。</p> <p>進路指導におけるアフターケアでは、担当者が計画的に卒業生の進路先を訪問し、関係者との情報交換や卒業生への現状の聞き取りを行った。また、今年度は卒業生や保護者、職場からの相談もあり、相談支援機関と連携したケースもあり、見えてきた課題については、在学中の指導・支援に生かしたい。</p> <p>今年度は、体育館改修等で例年秋に実施している「きらり祭（文化祭）」が開催できなかった。そこで、これまで以上にホームページや地域情報紙を利用して情報発信に努めた。</p>
--

<p>6 次年度への課題・改善方策</p> <p>(1) これまで構築したPDCAサイクルを意識しながら日々の授業に取り組み、各グループにおける授業研究会等をとおして授業改善を行い、教育課程編成につなげていきたい。</p> <p>(2) 氷川分教室は完成年度を迎える。入学希望者の推移から、県南の知的障がい教育特別支援学校として果たすべき役割が見えてきた。来年度は3学年6学級の生徒、一人一人の教育的ニーズを把握するとともに、教科学習や作業学習の教育環境を整備したい。また、初めての卒業生を出すあたり、進路指導部を中心に関係機関と連携を取りながら卒業生の進路実現を図りたい。</p> <p>(3) 学校創立50年。肢体不自由教育特別支援学校として創設され、半世紀を迎える。児童・生徒、保護者、職員、卒業生一丸となって創立50周年記念事業を成功させたい。</p>
